

モウヒトツノカケラ

目が覚めると列車は見知らぬ駅に着いたところだった。

奇妙な感覚だった。「ああ、夢だったのか？」

隣にはダンナがいて何かを話しながら、子供の手を引いてスーバーに向かっている。

入り口のリサイクルボックスに持って来た食品トレーとペットボトルを入れ、

今日の特売品をチェックしている。

そんな夢を見た。

…私にはまだダンナも子供もない。

車庫に入るといふアナウンスが流れ、駅に降りると

足早にエスカレーターを駆け上って行くサラリーマンの姿が見える。

「ここはどこだろう？」

駅名板には「つきがせふち」と書いてある。聞き覚えのない駅だ。

「今は何時だろうか？」

ケータイを開けるが、何故か電源が落ちている。

起動するも待ち受けがデフォルトのままだ。

イヤな予感がした。

データを調べてみると画像もアドレスも読み込んでいない。

起動不良かと思つて「且電源を落としてみる…」と、今度は再起動しない。

バッテリーを入れ直して何度も電源ボタンを長押しするも電源は入らなかつた。

そうこうしているうちにホームには私しか残っていないかつた。

「やっぱ……」

仕方なく改札に向かう

「さあ…どうしよう？」

改札口には誰もいない。駅員の姿さえも…。

自動改札に定期のSECCを当てると、追加料金540円と表示され扉が開いた。

普段利用している路線から1540円の駅つてトコだろうか？

切符売り場の路線図で捜してみるもの知らない駅名ばかりで現在地も分からない。

その途端、電気が落ちて薄暗い非常灯だけになった。

改札前は広場になつているが人影もなく閑散としていた。

すぐ側に店らしき建物もあるが皆、シャッターが閉まっている。

コンビニすらない…？

辺りは灯りもほとんどなく、マンションの窓にも灯りがない。

夜中つばい。

とにかく公衆電話を捜そう。

家に電話して誰かに迎えにきてもらおう。

大通りに出ればコンビニか交番ぐらいはあるだろう。

街灯のある方に歩き始めることにした。

それにしても真夜中のせいか、人通りがない。

クルマの音もしない。

そう思った瞬間、前方に人影が見えた。

四十歳ぐらいのオジサンだ。

もうじき夏だと云うのに分厚そうなコートを着ている。

早足で歩いているのにどンドン引き離されて行く。

大通りに出た時にはすっかり見失っていた。

ここには開いてはいないが、ファミレスとケータイショップ、それに中古車屋がある。

「さて、どちらに行こうか？」それにしてもここも誰もいない。

途中までは街灯が点いていたが、不思議な事にここは信号機も点いていない。

月明りもなく、辺り一面闇に覆われている。

「どこで何をしている！？」

いきなり背後から声があった。

振り返ってみると二人のオジサンが立って居た。

さっき見かけた人とは別のようだ。

作業着のような格好をしている。

「何といわれても……」

電車で目が覚めたらこの駅に着いていた事、ケータイが壊れてしまったようで電源が入らない事を話した。

「そうか、もう元には戻れんかも知れんがな……」そう言うといきなり私を突き飛ばした。

「……」

「瞬、目の前が真っ白になった。

が……気が付くと自分の部屋に立っていた。

夢だったのか？

でも部屋の真ん中で靴を履いたまま立っていた。

寝ていたんじゃないよね？

ポケットを弄るとケータイが入っていた。

取り出してみるとちやんと設定した通りの待ち受け画面、5歳の頃の私の画像だ。

電源も落ちていない。

「なーんだ。よかった。だが時間を見て驚いた。

8時を回ろうとしている。

外は明るい。ということは朝？

今日は何曜日だっけ？仕事は？？

TVを点けると情報番組をやっているが、曜日が分からない。

ケータイのスケジュールでカレンダーを見る。

月曜日だが表示が朱色だ。

祝日だったのか…。

なら慌てる必要はない。とにかくシャワーでも浴びよう。

靴を玄関に投げ、その場で全て脱ぎ浴室へ向かった。

シャワーを浴びながらさつきのことを思い出していた。

「元に戻してあげられないかもしれない…」だっただけ？そんなことを言っていたように思う。

ここは私の部屋だ。

職場に近くて家賃が前より少し安かったから半年ほど前に引っ越してきた都内のマンションだ。間違いはない。

…でもさつきは家に電話して誰かに迎えにきてもらおうと思っていた。

まだ実家にいる気だったようだ。

「ヘンな夢だったな」

自分に言い聞かせるようにそう呟いた。

身体を拭き始めた頃にケータイが鳴った。

非通知着信になっている。恐る恐る出てみる。

「…はい。もしもし？」

「あー、やっと出た。今何所におるんや？聞き覚えのある声だが思い出せない。

「部屋におるよ。さつき帰って来たんやわ。」どうやら実家の兄のようだった。

「ケータイなくしてな。この前からずーっと外から電話しとったんやで。心配したがな」。

見ると着信履歴が溜まっていた。

「あー、ゴメン。気づかなかんだ。で何か用やったの？」

「もう過ぎてしまったがな。セイジの三周忌やっつろ？ 忘れたんか？」

「え…セイジ？、誰やのそれ？？」

「何ゆーとんのや？ お前、大丈夫か？ 弟の名前忘れたんか？」

私には2歳下の弟がいたらしい。でも3年前に事故で他界したそう。

全く記憶がない。

「仕事が忙し過ぎてオカシクならたんちやうんか？ いっぺん帰つてこい！」

その後、兄と何を話したのか詳しく覚えていないが、「じゃー」と言つて電話を切つた。

どこかにスキャナーで取り込んだ時の子供の頃の写真が幾つかあつたはずだが、見当たらない。

父と母、兄と私の4人家族のはずだが、弟だど…？

「元に戻してあげられないかもしれない…」さっきの言葉が妙に気になる。

そうだ！ チズに訊いてみよう。

チズは同郷の同じ高校で同じ美術部だった。

都内の美大を出て潮と名の通つたメーカーのデザイン部門に勤めているはずだが…。

電話は繋がらなかった。コールを3回すると留守電にもならず切れてしまう。

メールを送るが、返信はない。

そうこうしているウチに時計は昼を回っていた。

「何か買ってくるか？」

近くのコンビニへ行くつもりでTシャツにジーンズといった格好で出かけた。

曇っているが、雨が降りそうな気配はない。

マンションを出てすぐ曲がつたところに…コンビニはなかった。

いつも利用している店だから間違えるはずがない。だが、そこは駐車場だった。

やっぱり何か変だ。

「元に戻してあげられないかもしれない……あの言葉がアタマから離れない。」

もう軒、その先の駅前にもあったハズだ。

だが、そこに駅自体がなく、民家が並んでいる。線路も見えない。

怖くなって急いで部屋に戻った。

そうだ。いとこのリョウちゃんに電話してみよう。

リョウちゃんは母方の叔母さんの子で、小さい頃からよく似ていると言われていた男子だ。

よく似ているハズなのに向こうは院卒のエリート……。違いはナンだろう？

電話は直ぐ繋がった。

「もしもしリョウちゃん？私、マコト。」

「おー、どーした？セイちゃんの三周忌にも帰らんかった？叔母さん心配しとらたぞ。」

聞き覚えのある声と口調に少し安心した。

「そのことなんやけど……私、覚えてへんねん、ホンマに私に弟ナンておつたて……そんなハナシ知ってた？」

電話越しに絶句しているのが分かった。

「なあ、マコト。今、ドコにおるんや？」

「自分の部屋やけど……」

「確か半年ぐらい前に引っ越したってゆーてへんかったか？」

「あー、リョウちゃんは場所知らんかったよね？」

「今は……住所を言おうとしたが思い出せない。」

「あ、あれ？なんやっただけ？」

「もしもし、マコト。ええか、俺が後でもつかい電話するからそこでジツとしてけよ。出歩くなよ？」

「う、うん、分かった。そう言っただけで電話を切った。」

郵便物を捜したが見つからない。

確かにここは私の部屋なのだが……住所が分からない。

数十分後、ケータイが鳴った。リョウちゃんだった。

「マ―子、叔母さんにも兄ちゃんにも引越した事ゆ―てへんかつたら？みんな知らんて…。」

「あれ、そ―やったかな？…なあ、ケータイつてGPS機能つてなかったらけ？」

「それにはお前がその手続きせんて…やった」とあるんか？」

「…ない。」

ワケが分からなかった。

覚えのない弟がいて、しかも事故で亡くなつていて。

いつも行つてるコンビニもなくなつていて…

「リョウちゃん、私、ホンマに病気かもしれん。どないしよう…。」

「…ああ、やつぱり。」

リョウちゃんとは違う声が聞こえた。

「リョウちゃん?!」

「だから元には戻せんかも知れんと言つたら？」

気が付くとその声は背後から聞こえてきていた。

さっきのオジサンだった。

「ひゃー!?!ぎいー!?!あああー?!」

あまりの驚きに奇声を発して浴室に駆け込んで内側から鍵をかけた。

必死にリョウちゃんに助けを求めたが電話は切れてしまつていた。

リダイヤルしても今度はコールしている気配がない。

ドアをノックする音とオジサンの声が聞こえた。

「オイ、大丈夫か？」

「だ、誰ですか?不法侵入で警察呼びますよ!」

私はこのままレイプされて殺されてしまうのだろうか?怖くて仕方がなかった。

「落ち着けよ。そのままでもいいから話を聞け。」説教強盗かとも思った。

「さっきな、オマエが居た所は元々居たのとは別の世界でな。ここもまた元の世界とは違うんだ。」
「？！ナニ言ってるんですか？？」
訳が分からなかった。

「まあ、そう言っても分からんだろうけどな。」

110番をダイヤルしたが、何も応答がない。

「はあー、まあいいか……じーせXXXXXXXXXX」

ドアの向こうでため息の後何か呟く声が聞こえたが、それから物音がしなくなった。

恐る恐るドアを開けてみる。

誰もいなかった。

部屋にも押し入れにもベランダにも……

玄関とベランダの戸締まりを確認してベッドに横たわった。

「一気にチカラが抜けた。もう夕方になっていた。」

TVを点けてみる。

普段、あまりTVを観る機会はないのだが……知っているCMやタレントが人もいない。

いつからTVを観なくなっていたんだろ？

いろいろあつたせいかわトウトしていたようだ。

気が付くと辺りは真っ暗になっていた。

部屋の窓から近隣のマンションや戸建てが見えるのだが、皆窓に灯りが点いていない。

深夜なんだろうか？TVはどのチャンネルも砂嵐になっていた。

ケータイを開くが、また電源が落ちてる。

イヤな予感がする。

いつも使っている目覚ましも見つからない。

今は何時なんだろう？

いつの間にか眠ってしまったようだ。

昨晚はあれほど捜して見つからなかった目覚ましが…いつもの場所にある。

TVを点けるといつもの朝の番組をやっていた。

ケータイも電源は落ちていないし、待ち受け画面も設定した5歳の私だ。

身支度をして仕事に出かける。

見覚えのある街並、角を曲がればいつものコンビニがあった。

「悪い夢でも見てたんだな…。」

いつものようにサンドとカフェオレを買って駅に向かう。

駅はあった。

昨日見たのは何だったのだろうか？

都心に向かう電車は朝のラッシュだ。

いつものように乗り込み、なるべく込み具合の少ない車両の真ん中の方へ移動する。

空いたつり革があった。

車両が大きく揺れ、そこに倒れ込むようにしがみついた。

と、目の前に座っている人を見て驚いた。

あのオジサンだ！

あの作業着のまま大きめのブリーフケースを抱えている。

一瞬、目が合ったが、何事もないうちに逸らされた。

首から吊るしたケータイで時おり何かを確認している。

気のせいかな、昨日見た時よりかは若干若く見える。

じっくり観る機会がなかったからか、オジサンと呼ぶにはちょっと可哀相なトシだと思う。

私の事を覚えていたのだろうか？あれは単なる夢だったのか？

そう思っているウチに降りて行ってしまった。

職場に着いたところでケータイにメールの着信があった。

チズからだった。

私から意味不明のメールが届いたらしい。

昨日のメールが届いていた？！

慌てて電話してみた。

すぐに出たが「週明けは朝イチでミーティングなんだわー、ゴメン！後でかけ直すから...。」
と言って切られてしまった。

送信履歴をチェックするが、昨日チズに送ったメールの控えは残っていないかった。

昼過ぎに電話が掛かってきた。

驚いた事にチズもつい最近、ウチの近所に引っ越ししてきたと言うのだ。

久しぶりだし、今日は早く終わりそうだから近所で行こうという事になった。

駅前の少し小洒落た居酒屋に入り、一人ともカクテルを注文した。

チズとこうして飲むのも何年ぶりだろうか？

昨日のメールを見せてもらうとしたところ、着信時には開いて見られたのだが、

返信しようと思っただけなら無くなってしまっていたというのだ。

削除した覚えもないのに。

メールには「私に政治ついていたっけ？」とあったらしい。確かにイミフだわ。

お互いの仕事内容と人間関係に共感し、話は盛り上がった。

三杯目を注文した頃、チズは私に訊ねた。

「そういえばスズラ君の事覚えてる？」

「うん...えつと、誰だっけ？w」

「高校の時、美術部に居た...。」

「…そんな男子いたわけ？」

「いたよー。私のデッサンしてくれた…。」

「それ、卒業する前もそんな事言っただけ？」

「うん、誰も覚えてないって言うんだモン。でもちゃんとかロッキー貰ってるし…。」

「思い出した！」

「でしょー？いたよね？スズラ君。」

「いや、あの時チズがみんなに訊ねていたのを思い出した！」

「そっちはかよー！チズは覚えてないの？スズラ君のこと。」

「うん、ぜんぜん覚えてない！」

「マジでー？なんでよ？よく3人でアグリッパ描いてたじゃん！」

美術部は人数も少なく、全学年合わせても毎年5人ぐらいしかいなかった。

そのうち何人かは掛け持ちで美術室にはいつも3人ぐらいしかいなかったから、覚えていないわけはない。

チズが言うにはあまり出席率は高くはなかったが、線が細く博識で知的なスズラ君に

ちよつと憧れていたらしい…。

その彼が3年の夏休み明けから忽然と姿を消したというのだ。

転校した話もなく、それ以前に担任すらも誰一人として彼の事を覚えていない者がいなかった。

チズだけは夏休みの間に彼からデッサンを貰っていたから忘れられなかったという。

「いつかねー、私とスズラ君が二人つきりになったことがあつてね。」

「おおっ！な、何かあつた？？」

私は唐辛子とマヨネーズをたらふり付けたケソを頬張りながら興奮気味に訊ねた。

「スズラ君、こんなこと言つてた。」

「ふん！ふん！」

「今、居るこの世界が現実じゃないってよく言うよね？新倉さんもそう思う？」

「うあー、厨一くせー！！」ハナミズを吹き出しそうだった。

「ドコに行っても自分の居場所がなくて、それを現実と認めたくない。

…それなら気に入る現実を自分で作りゃいいのにね。」

「ナニ言ってるんだ？こいつ…う？」

「あたしも最初そう思ったよ！

でも自分の居場所なんて結局、自分で人間関係作っていかなきや

認められないって言いたかったんじゃないかな？って…。」

「ふうん、言うじゃん。スズラ。」

そのあと、チズが貰ったというクロッキーを見せてもらう為に寄って行くというハナシになり、店を出た。

時刻は夜の10時を回ったことだった。

「こーんな時間に乙女一人が酔っぱらって襲われたりしない？」

ペロペロに酔っぱらっている私がそう言う

「だーいじょうぶよ！カッパルだと思われちゃう〜！」とチズ。

「ソレって…私がオトコってコトおー？ひーどおーいじゃん！」

「マ一子は昔つからオンナの子してなかったからヨク間違われてたじゃん！」

そうなのだ。

背も高く、スレンダーな私は昔つからチズと緒にいとカッパルだと思われてたわけ…。

でも流石に三十路を前にしてそれはなからーとは思っていたのだが…。

そんなこんなでチズのマンションに着いた。

めっちゃ近所だった。

私のマンションから2ブロックぐらいいしか離れていない。

渡り廊下からウチのマンションが見えた。

「ウチ、あれあれ！あそこ5階！」

「えー、ナンだ。めっちゃ近所じゃん！毎日、双眼鏡で覗いてあげるーw」

「ナニwストーカー？w w w」

夜中だというのにゲラゲラ笑いながら部屋に入った。

相変わらずセンスのいい、コザッパリとした部屋だった。

間接照明が多用しており、壁沿いには例のスズラ作の高校生の頃のチズのクロッキーが置いてある。

「もう飲まないよね？ウーロン茶でいい？」

「うん、ありがと」

なんとなく覚えのあるような…ないような、右下に Seiji Suzulia のサインがある。

「スズラって、ドコの人？」

「えー、ドコって…日本人だったよ。」

「サインに Suzulia じゃなくて Suzulia になってるよ。スズラー！」

「ホントだー！気が付かなかつたー。」

「名前セイジってゆーんだ。スズラー！w」

あの奇妙な夢の中で弟とされていたのもセイジだらうな。

「高校生にしちやー上手いよねー。」

「その辺の美大レベルのデッサンだよ。これは…」

「目見て巧いと思った。」

制服の質感とチズのはにかんだ笑顔がよく描かれている。

結局、そのあとくちっちゃべつて、チズの部屋を出たのは深夜の0時前だった。

「近所だけど…大丈夫かなー？」心配するチズに

「私、人で歩いててもオトコにしか間違われなから…w」

「そーだよねー！w」笑顔でそう返すか？

「をいー！w」

そう突っ込んで部屋を後にした。

近所とはいえ、深夜の静まり返った街は不気味だった。

幹線道路も電車も近くに通っているハズなのに音がしない。

誰もおらず、家の灯りもなく、街灯も所々にしかない。

チャリン…背後で何かコインのようなモノが落ちる音がした。
振り返るが、何も落ちてはいない。

マンションに着いた。

エレベーターで5階まで上がる。

降りたところで誰かがエレベーター待っていた。

マンションの住民だと思い、軽く会釈して通り過ぎた。

「あれ？」と思った。

あのオジサンに見えたのだ。

怖くなって確かめることもせず、そそくさと部屋に入った。

ナンか祟られてるわ。

ああ…、さっきのチズの部屋から改めて見るとキタナイ部屋だ。

服は脱ぎ散らかしてあるし、ゴミも分別ごそしているものの、大きな袋に3つも溜まっている。

「明日は水曜日か…不燃物だらけ？」

満杯の60ℓのポリ袋を二重にして閉じて玄関に置き、シャワーを浴びて寝ることにした。

ベッドに入り目を閉じた瞬間、地鳴りを感じた。

「ガガガガッー！」いきなり大きく揺れた。地震だ。結構大きい！

そう思ったが、数秒して収まった。特に被害はないようだ。

TVを点けてみる。速報が出た。東京の震度は4と出ている。

「やだな」あの震災で帰宅困難になった日の事を思い出していた。

そういえば、あの都庁のフロアで雑魚寝した時に声を掛けて毛布をくれてた人も…

あのオジサンに似ていたような？

ナンか最近、あのオジサンに取り憑かれていないか？マジで今度お祓いしてもらおうか…？

そう思いながら眠った。

またあの夢を見た。私にはダンナと子供がいる。

共稼ぎで毎朝、子供を保育園に送って行く。

私によく似た男の子だ。

子供を保育園に送って行った後、ダンナと一緒に駅まで歩いて行く。

今度は注意深く観察しようと試みてみる。

ダンナの顔はよく見えないが、作業着のような格好をしている。

「じゃー」と言っただけで違う路線のホームに降りて行く。

目が覚めると目覚ましが鳴る1分前だった。

「まさか…」

さっきの夢のせいかな？起きたばかりなのに動悸が激しい。

やっぱり病院か、お戚いしてもらおうか？

窓の外、空が異様に紅い。朝焼けか？

ベランダに出て驚いた。

空だけじゃない、何もかもがフィルターを掛けたように赤い。

顔を洗い、充血を取る目薬をさしても…やっぱり赤い。

「ボオオオオー」どこかでアボカリプティックサウンドのような音も聞こえる。

「うわぁー、終焉っばい！」

TVを付けるが特に何も報道されていない。

身支度をして仕事に出かけることにした。

駅に着くと人が溢れている。

どうやら昨晩の地震で路線の設備の部が破損し、現在不通となっているようだ。

職場に連絡を入れるが、話し中でなかなか繋がらない。

仕方ないので(?)チズに電話してみる。

スクに出た。

「おつかれー、昨日はどーもねー！」そう言うど

「あれ？マー子？うどーしたの久しぶりじゃん！」

まーた朝からヤラレタと思つた。

「なーに言つてんの？昨日飲み行つたじゃん！」

「は？昨日？？何言つてんの？もう何年も会つてないよ！」

マジかー？！

「えー、あーそうだらけ？ゴメン。ゴメンーカン違ひみたい！」

もう勘弁してくれよおー！そう思つて電話を切つた。

「おー、おいーマーア子おー！」

ぐつた返す駅の人混みの中で誰か呼ぶ声がある。

手を振り挙げながら人混みから出て来たのはリョウウちゃんだった。

「リョウウちゃん！」

「よー、あの後、心配になつてなー近くまでクルマで来たんやー」

「あの電話、通じしつたん？！」

「そりやそーやろ？あその後、何回掛け直しても繋がらんかつたけどなー」

「はー、よかつたわー！」

「どーせ今日はあつちうちで電車も止まつとるし、仕事行かれへんやろ？どろかで朝食食わんか？」

そう言つてリョウウちゃんのクルマで近くのファミレスに行つた。

電車が止まっているせいか？結構混んでる。

その割に従業員の数が足りていないらしく店内は殺気立っていた。

「ほか…行しか…」

都心とは逆の方向にクルマは走つた。

10分ぐらいしか走っていないはずなのにいきなり緑豊かな風景になつてた。

もうここら辺の空は紅くない。

やがて家もまばらな郊外でファミレスに入った。

さすがにここまで来ると空いてるようだ。

メニエーを見ながらリョウちゃんは訊ねた。

「俺は朝定。マー子は何にする？」

「カツ丼！」

「朝っぱらかいな？」

「ハラ減つてんねん。」

「相変わらずやな！」

そう笑う顔に何やらホツとした。

「大丈夫みたいやけど…あの後、何が起つたんや？」

そう訊ねるリョウちゃんにこれまで連の不可解な出来事を話した。

最初は興味深く聴いていたリョウちゃんの表情が次第に曇っていった。

「…マー子、病院行つた方がええんちゃう？」

「やつぱり…こんなハナシ信じられへんやんな！」

本気で自分がどうかなってしまったのかもしれない。

でもそれ以前に身内にも信じてもらえなかったことがやつぱりショックだった。

「ちょ…トイレ行つてくるわ。」

個室に入つて座つた途端ため息が出た。

次の瞬間、屢を切つたように涙が溢れ出した。

「私に体何が起つているんだらう？」

もう何が何だか分からなくなつてしまつていた。

声を殺して泣き続けていた。

ようやく落ち着き、顔を洗つて席に戻ると…リョウちゃんはいなかった。

リョウちゃんが食べていた朝定のお膳もなくなつていた。

「あちゃー」

よく見ると店内に誰もいない。

店員さんの姿さえ見えない。

私の食べていたカツ丼のお膳だけが残されていた。

仕方なく座って食べ残していたおしんこを摘む。

外は雨上がりのようだった。

いつの間に雨なんか降っていたのだろうか？

雲の間から陽が差し込んで、当たった所がキラキラと輝いている。

こんな時でも世界は美しいと思った。

「気が済んだか？」

ギョツツとして振り返るといつの間にか、背中合わせにあのおジサンが座っている。

「いつから……？」そう思ったが、言葉が出ない。

「そち行つてもいいか？」

そう言うとおジサンは特大のバフェと水を持って私の前に座った。

「オマエが言いたい事は分かる。オマエがどうかしてしまつたワケじゃない。

ここは元々お前の居た世界じゃないんだ。」

「あはははははー！ーっ！」

その言葉を聞いて自分がだんだん壊れて逝くのが分かった。

目の前で中年のおツサンがバフェ食いながら真顔で「こんなこと言つてるー！」と思うと

もうね。どーにでもなれー！と思った。

「まあ、落ち着けよ。」

飲み残してあつた水とお茶を「気に飲み干した。

「スーミーマセーン！」ありつたけの声を出して店員さんと呼んだ。

厨房からウェイターのお兄さんが出てきた。店員いるじゃん！

「大ジョッキー下さい！ビールの大ー！」

飲まないとやつてられない！と思った。

スグにビールは出てきた。

しかも枝豆も付いている。

果気に取られてるオジサンを尻目に気に半分ほど飲んだ。

「で、なんだって？」

「オマエ、そんなに飲めたらけ？」不思議そうにオジサンが訊ねる。

「オジサン、私の何を知ってるの？ストーリーカー？」

しばらく私の顔を眺めてこう言った。

「もう、元には戻れんからな。この世界で生きて行くんだぞ。」

「ちよつと待つて！最初から話して！」

今、飲み始めたばかりなのにだんだんロレッツが回らなくなってきた。

「最初つてどこからだ？」そう返すオジサンに

「あの夜中の駅より前にもあんのー？」

「ああ、何度かな。気付いてないだけで何度か別の世界に移り渡っている。」

大ジョッキを飲み干し、またも大きな声で店員さんと呼んだ。

「今度はチューハイダブルの大きください！」

「オマエ、子供の頃に母親が亡くなったのを覚えてないか？」

少し、ぎよつとした。

子供の頃、そんな夢を何度か見たことがあつたからだ。

目が覚めてそれが夢だったと分かつてどれだけ安心したか…。

「何度か夢を見たよ。でも…あれ、夢だったんだよね？」

「乗っていたバスがトンネルの中で事故に遭い、炎上した記憶は？」

「…それもある。」

「自転車のブレーキが利かず、下り坂で大通りに飛び出してトラックにぶつかったゴトは？」

「…あれは全部夢じゃなかったの？オジサンなんでそんなゴト知ってるの？」

気付いたら電車の中に座っていた。

朝のようだが車内はラッシュ時より明らかに空いていた。

「ここはどこだろう？」

辺りは見慣れた風景ではなく、郊外らしき緑の中を走っていた。

「今、何時だろう？」

ケータイを取り出す。もう10時を回っていた。

「やっぱ！慌てて職場に電話を入れた。」

「はい。お世話になっております。株式会社：」同僚のチズが出た。

チズとは同郷の同じ高校の美術部で……

「チズ？私、マージ子。」

「おー、どーした？」

「今日、具合悪いから休むわー。プチョーに言っというてー。」

「なーに？風邪？あそー、わーった。お大事にー」

さっきまでは確かにチズは他の会社に勤めていたはずだった。

いつの間にウチの会社に……同僚になつていたんだろう？

それからしばらくして電車は終点の駅に着いた。

なんとなく見覚えがある。

駅名板には「つきがせふち」と書いてある。

ああ、初めてあのオジサンに遭遇した駅だ。

郊外のベッドタウンといった佇まいだ。

自動改札をSEIBOで通ると追加料金540円と出た。

改札を出ると昼と夜とじゃ大違いな寒気だ。

近くに学校でもあるのだろうか？学生がうじゃうじゃいる。

親子連れも沢山いる。

「少子化なんてウソじゃね？」

駅を出て大通りに出るとあの見覚えのある場所に出た。

ファミレスとケータイショップ、それに中古車屋がある。

あの晩には気が付かなかったが、もう少し先の交差点に大きなスーパーと交番が見える。

平日の午前中だというのに賑やかだ。

人の流れに沿って歩いているウチにスーパーの入り口まで来た。

「ここは…？」あの夢の中で見た親子で来たスーパーだ！

リサイクルボックスも特売品の掲示板も同じ位置にある。

「よくここへ買い物しに来たの覚えてるか？」

いつの間にかオジサンが隣にいた。

「オジサン…。」

「オジサンはよせよ。オマエとは元々4つしか離れていないんだぞ…今はもう違う世界で生きているけどな。」

「…私たちが結婚していた？子供もいた？」

「ああ、セイジって子がな。」

「その名前って…。」

「オマエの弟や同級生にもいたんだろ？世界が異なると少しずつ違う人間関係として表れるようだな。」

「…どんな子だったの？」

「オマエのケータイの待ち受け画像、誰だと思ってる？」

「これは5歳の頃の私…じゃ？」

「左の目元に泣きボクロが写っているだろ？オマエにボクロあるか？」

「！」

「それにとー見てもソレは20年以上前の画質じゃないだろ？」

「これ…私の子？」

ケータイを持つ手が震えた。

満面の笑みを浮かべてこちらを見ているのは5歳の頃の私じゃなく…
覚えもないのに何故か涙が溢れ出た。

「ねえ、何でこうなっちゃったの？何でこの子が今ここにいないの？」

「それはオレにも分かんない。たぶん、オマエはこれからオレと知り合って結婚するんだろう…」

「これからって…今のこの異常な事態の事言ってるの？やっぱオジサン、アタマおかしいんじゃない？」

涙もハナミズもズルズルの状態でヨダレを飛ばしながらオジサンを罵倒した。

「オマエに必要なのはドコが問題の起こらない世界なのか？見極める事じゃなく、

どんな問題が起つてもそれを現実として捉え、対応する事なんだ。分かるか？

どの世界を選んでも何かしらの問題は必ず起る。」

「どんなことでも…って、そんなの神様じゃないんだから！」

「だから引き寄せるんだよ。こうなりたい」と思う自分を…いや、「なりたくない」じゃダメだ。

「私はこうである！」と自身に言い聞かせてな、自分を取り巻く世界に振り回されるな。

傍若無人に好き勝手に振る舞え、と言っているんじゃない。

起こっている出来事ひとつひとつに成り得たい自分として対応し、

その世界を自分の現実として取り込むんだ。」

「ナニ言ってるんだか、ますます分かんないよ！」

「いいか？マコト。思考がその世界を引き寄せるんだ。

いつも事故を恐れていたから自ら事故を引き寄せてしまう。

毎日、人間関係をくよくよと悩んでいたから更に複雑な人間関係を引き寄せてしまう。

自分の「こうありたい。こうあるべき」と思う姿をいつもイメージするんだ。」

「それって、ただの自己暗示じゃん！」

「違う。その世界を自分に引き寄せ、現実とするんだ。

オレもこうしてさまよえるオマエを見つけることができた。」

相当オカシなことを言ってるハズなのにオジサンに惹かれている自分がいた。

やっぱり私はこの人と結婚していたんだろうか？

「何度もその気持ちを踏みにじる出来事に遭っても拗ねるんじゃないぞ。気にしなきゃいいんだ。」
ボンボンと私のアタマを撫でながらオジサンはそう言った。

「……………」

「じゃあな、そろそろ行くわ…。」

「行くつてドコへ??」

「元々いた世界そのものには戻れないが…かなり近い世界にな。」

「…じゃないの? 私は?」

「生きるんだ。どの世界に飛ぼうが、自分をしっかり保つてな。」

「そんない!」

「きつと、また会えるから…」

そう言つてオジサンはグイッと私を引き寄せて抱きしめた。

「…うん。」

「またな…」オジサンのカラダが離れたと思つた瞬間、

列車のドアが開いて人が慌ただしく降りていく気配で目が覚めた。

「夢だった…?」

ケータイを開くと設定していた待ち受け画面、去年チズと行つたサイパンのビーチだ。

「えらいリアルな夢だったな」オジサンに抱きしめられた感覚がまだ残っている。

そう思い、人混みの中いつもの改札へ向かつた。

ポーツとしていたせいか、階段に差し掛かり、前の人の靴の踵を踏んでしまった。

「あーすみません!」

でかいプリーツケースを抱えたお兄さんが思いっきりツンのめつて転けてしまつていた。

「もー! 気をつけてよー! w」

立ち上がり、半分笑いながらそう言つて振り返つた。

ドコかで見覚えのある笑顔だった。